



必然的に数釣りの勝負となり、目標を100匹として、何時もそれ前後のアジが釣れたものだ。アジの他にはサヨリ、チシャゴ(イシダイの幼魚)時には大きなボラなんかも掛かり、あちこちで大きな歓声や悔しい叫び声が響いていた。

さかな釣り

6

夏になると夕方からアジを釣りに漁港までよく行ったものです。小学生の私にはエサになるアミが自分の小遣い銭だけでは買えず、友達と釣り具店で待ち合わせして2枚の百円玉を一つのアミエビに変えて自転車釣りを始めたと走らせた。

夕方の五時にもなればそれなり子どもたちと少しの大人たちが防波堤に並んで竿を出して、街灯の下は何時も誰かがすでに釣りをしていた。日没前にもなれば釣り場は人と人でごった返っていて、釣る事だけではなく隣の人の事にも注意してトラブルがないように時合いを迎えるのもアジ釣りの特徴でもあった。



mayu 2012

aburayamayu

あの頃は普通に子どもたちだけで日没まで釣りをし、当たり前のように夜道に一人で歩いて、今思えばとても危険な事のようにも思えるが、その中で何かを学んだ事はとても大きかった。その反面もしもの危険性も多くなると思う。

私は今、親になり子どもたち何をしてやらせるのかわからない。当時の僕たちは、バケツに大漁のアジを入れ自転車を積み込み、楽しみにしているテレビ漫画を見るため、友達に「じゃあね」と家路を急いだもの。つづく

＊釣りは、防波堤や磯ももちろん船からでも、ゴミをその場に置いてきたり、ポイ捨てをしないように心がけ、ライフジャケットを着用するなど、安全にも配慮して大いに楽しんで

7月 兼題 「港」

藤本健人 選

片肌港まつりの撥さばき 廃空港しおから蜻蛉の滑走路 鳥都の風も降りてくる 港 烏ラップを下りる昔の名で呼ばれ 海鳴りの機嫌を聴いて港 出征前港に立つた古写真 島船の波を揺らし去る 余所者を照らす港の灯が温い 出港の汽笛別れの時を上げ 漁火に両手あわせる妻の影 妻の待つ港へ逸る大漁旗 漁船待つ港に妻の薄化粧 この港からも幾たり海ゆかば

ふみこ 仙京 網幸 仲幸 華子 ひろこ 春菜 扶巳 篤世 海舟 星秀 ゆたか 幸子

7月 兼題 「先生」

川上甫卸 選

灯の消えた港華の影もなく 愛惜を遺す港に或るドラマ 魚臭き港別れの白い雨 豊漁の夢抱いてゆく海女港 佳3 鮒はねる港活気の朝のせり 佳2 道草で港に寄った深い理由 佳1 傷ついてふたりの港探しあう 地 港は母悲喜もこもを漂わせ 天 震災の港に眠る風数多 軸吟 再会も永遠の別れも知る港 もう逢えぬ女の手を振る風港

幸子 緋呂子 仲吾 久恵 洋子 甫卸 篤世 久恵 幸子 仙京 知絵 幸子 緋呂子 網代

《詩》

井手 三穂子 サルスベリ

サルスベリ サルスベリ サルスベリ サルスベリ 枝先に群がり咲く ピンクやホワイトの花 六枚の花びらがちぢれて はなやかに見える

あなたの世界に... サルスベリの花言葉は 『雄弁』

先生と呼ばば四五人振り返り 先生と呼ばれ今に修行中 校長と呼ばれ友の老け顔よ 師をなぞり師を追い越せと筆はこぼ 先生は三歩さがっていい見えず 亡き師への思慕つらさる「海の声」 海山が先生だった幼き日 「酒を控えよ」酒豪の医師の処方箋 先生の信じてはむらランドセル 九十の師は教え子に教えられ 師の生きし道美しく夕焼ける 夾竹桃白く輝く師の忌日 師を越えた者皆師が手焼いた奴 父帰りの医師を待って島の民 師の背を先生にしてまた遠い 師の祈り綴る慈愛の通信簿 秘伝などない丁寧師の教え 先生と呼ばる師の無き風の街 軸吟 先生はさじ加減まで教えない

《投句》

東京 馬場喜代治

願ひただ一つになれり星今宵 風にはか一片ほどく蓮の花 雨後の朝ふと庭隅に茗荷の子

健人 春菜 華子 幸子 緋呂子 仲吾 久恵 洋子 甫卸 篤世 久恵 幸子 仙京 知絵 幸子 緋呂子 網代

《短歌とエッセイ》 市山 節子

城崎 (兵庫県・山陰)

《短歌とエッセイ》 市山 節子 城崎 (兵庫県・山陰) トネルのあわいに光る日本海わが絵ごころを 駆き立てて過ぐ この街のいで湯見つけしコウノトリ駅に佇む銅像となりて 彼方より呼びかけるごとく川沿いに直哉ゆかりの桑の木が立つ 歌碑めぐる散歩コースに投稿のポストもありて 紙片差し込む 無気力のおのれに喝を入れたくて道智上人の独 鉛水(どっこすい)のむ かがを持ち浴衣にこま下駄ひびかせて外湯めぐりに心を放つ 湯の宿に夜(よ)の川ながめて文人の気分ひたる今日のひと日を

ゆかたの似合うまち

以前から心惹かれていた城崎(きのさき)駅に降り立つと駅前美しい湯飲み場のそばに、この街の温泉を発見したというコウノトリの銅像が私を迎えてくれました。 この街の魅力は川沿いの柳並木に太鼓橋、白い壁の倉、木造三階建ての格子戸の建物が並ぶ昔のま、の風情のあるたたずまいです。この情景に溶け込む様に観光客が駒下駄に浴衣を着て外湯めぐりをする姿が、両岸の柳の樹をバックに良く調和して映画を観ている感じでした。どこを切り取っても絵になる風景で、夕暮れまで眺めました。 城崎温泉は志賀直哉をはじめ多くの作家、歌人、俳人が訪れた所だけに二十の歌碑が文学散歩道に建てられており、城崎ならではの情感漂う文学の雰囲気を味わう事ができました。



投稿

悲しい一片の書

篠崎 義孝

運命をきめた赤紙(召集令状)が来たのは、昭和十九年九月二十九日の夕刻でした。十月一日に大村四十六連隊入隊通知でした。 戦没した兄は勝本町の霞翠国民学校(小学校)に教員として勤務中でしたが、教えていた三年一組の児童と別れを告げました。 郷ノ浦港まで四里の道を、父母と見送りのため、汗だくで到着、百人近くの乗客の中に交じり、歓呼の声に送られ乍ら乗船。「睦丸」はテープで埠頭は埋めつくされていました。 兄とは、入隊する方々を



8月5日に見られた二重の虹。左京鼻で。yujibaba